CSEAS
京都大学東南アジア研究所ニュース
NEWSLETTER
CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES, KYOTO UNIV.

（2003年11月11日～2004年４月５日）　No.50

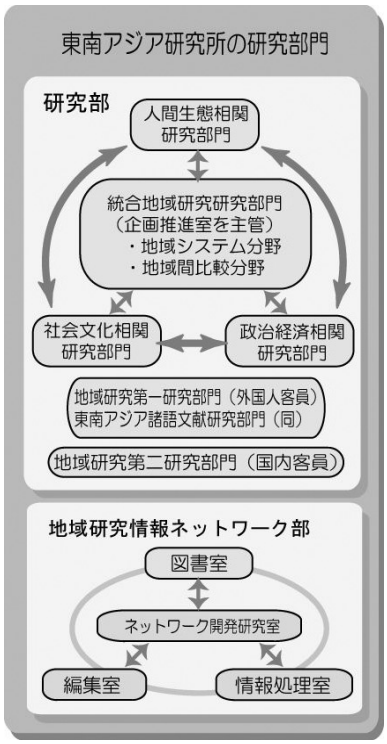
附置研究所として新たなスタート

2004年4月1日をもって、東南アジア研究センターは京都大学附置の東南アジア研究所として新たな歴史を刻んでいくことになりました。

1965年の官制化以来、東南アジアの総合的地域研究を推進する研究機関として成長してきましたが、科学技術・学術審議会学術分科会に設置された国立大学附置研究所等特別委員会でその活動が評価され、研究センターから附置研究所への改組が認められたことによるものです。これを機会に、地域研究の中核的研究拠点としての機能を一層高め、研究所の名に恥じない研究活動を推進するとともに、地域に関連した資料・情報の収集・発信にもつとめていかねばなりません。所員一同、気持ちを新たにこの課題に挑戦していきます。

研究所への再編を機会に、部門等の改組を行いました。図に示しましたように、従来の地域相関動態研究部門を「統合地域研究研究部門」に改め、東南アジアを基軸にしつつ地域間比較研究や地域間関係を視野に入れた、より総合的な地域研究を開発する部門を新設しました。また、従来、資料部として図書室、編集室、情報処理室の3室を設置していましたが、これら3室に「ネットワーク開発研究室」を新たに加えて、「地域研究情報ネットワーク部」を新設しました。資料・情報の収集・発信機能をさらに高めるとともに、地域情報学の分野を開拓していくことになります。従来からの研究部門にこれら新たな部門・部が加わって、7部門1部という構成で東南アジア地域の総合研究を推進していくことになります。

ニューズレター前号（No.49）でお伝えしましたように、現在、世界の各地域を対象とした国内の研究機関が連携して、地域研究の一層の推進を図ろうとする「地域研究コンソーシアム」の活動が始まろうとしています。東南アジア研究所は、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と協力しつつ、こうした全国的な地域研究の共同・協力体制を推進する拠点機関としてその運営を担っていく予定です。また、学内には、アジアやアフリカだけでなく世界各地でフィールド・ワークにもとづく野外調査を行い、外国の研究機関と共同研究を進めている部局が数多くあります。東南アジア研究所は、こうした学内の部局とも一層の連携と交流を図り、地域研究やフィールド科学を軸にした学内のネットワークづくりも進めていく予定です。



なお、附置研究所への改組にともなって、東南アジア研究所へと名称を変更しましたが、その英訳名は、従来のCenter for Southeast Asian Studiesを用います。CSEASとして国際的に認知され、親しまれてきた名称を変更する必要はないとの判断からです。これまでと同じく「東南ア研（CSEAS）」が略称となります。「東南ア研」の略称で、皆さんによく知られた、親しみのある研究所となるよう、所員とともに努力を傾けていく所存です。関係の皆さまには、この場をかりて、一層のご支援と所員一同へのご鞭撻・ご教導をたまわりますようお願い申しあげます。

田中耕司（所長）

はれやかに東南アジア研究所看板除幕式

4月2日に尾池和夫総長、本間政雄理事を迎えて東南アジア研究所の看板除幕式が執り行われた。

田中耕司所長より、附置研究所への改組に至る経緯の説明とこれを機会に所員への一層の努力を求める挨拶があった後、尾池総長より東南アジア研究センター設立当初のいきさつや、刊行初期の季刊誌『東南アジア研究』に総長を含む地質・地震関係者の論文が掲載されたエピソードを交えながら、京都大学に誕生した13番目の研究所への激励と期待を込めた祝辞があった。

そのあと、尾池総長、本間理事、田中所長、白石 隆副所長によって看板の覆いがおもむろに外されると、参列した関係教職員から拍手がわきおこった。

式後、加藤 剛大学院アジア・アフリカ地域研究研究科長、山田 勇前副所長を交え、東南アジア研究所とアジア・アフリカ地域研究研究科を核にした地域研究拠点を川端通荒神橋の現キャンパスにつくる構想をめぐって、意見が交換された。

地域研究コンソーシアム設立準備関連事業

前号で紹介した「地域研究コンソーシアム」というアイディアを、大学や研究組織のみならず実務家やNGOにも知ってもらい、より広い仲間とともにその設立に向けた動きを加速するために、2つの集会を開催した。

まず1月9日、東京・学士会館において、「地域研究を？する」と題するワークショップを開催した。地域研究は間口の広い学問だ。このことこそ新たな展開を生む活力源であり、地域研究コンソーシアムはその活力を最大限に引き出そうとする試みである。そこで、個々の研究組織や研究者のもつ特色を、まずお互いに認めて、建設的に批判し合い対話を重ねる第一歩にする、というのがこのワークショップの趣旨である。「地域ユニットをどう捉えるか」「地域間比較の潜在力とは」「地域研究はディシプリンか」「地域とどう関わるか」という4つのテーマを設定し、それぞれ異なる研究分野・地域を対象とする3人の研究者による話題提供に続いて討議した。もとより議論は集束するものではない。しかし、既存の研究分野を跨ぐ新たな研究分野の生みの苦しみや研究対象である地域における実践、地域への介入のあり方などに関して、個々の研究者や組織が真摯にかつ積極的に立ち向かっていることを理解しあう一助になった。

続いて1月10日には、東京・霞ヶ関プラザにおいて、「人間の安全保障――地域研究の視座」と題する国際シンポジウムを開催した。これは、地域研究コンソーシアムのアンブレラ・プログラムの1つである「人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究」（代表 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 黒木英充助教授）が主催したものである。人間の安全保障は最近10年間に急速に普及した概念だが、国際政治や国民国家の装置としての議論が先行している。これに対して、その言葉の本来的な対象である人々の生業や生活に立脚した「人間の安全保障」を新たな学として構築する一歩を地域研究から踏み出すことを企図したものである。第1部「地域研究は『人間の安全保障』をどうとらえるか」では、地域研究の特色であるフィールドに立脚した視点やマルチ・ディシプリン、また地域の多重性や地域研究者による地域への介入のもつ、新たな「人間の安全保障」学構築に向けた可能性について議論した。また第2部「イラク戦争後の世界における『人間の安全保障』」では、平和学者のヨハン・ガルトゥング氏と作家の池澤夏樹氏に講演していただいた。

これらの集会を経て、現時点で15の研究組織やNGOからなる設立準備委員会が立ち上がり、その活動を開始した。近い将来、みなさんに地域研究コンソーシアム設立の報告をすることができるであろう。　（文責：河野泰之）

その他の主な内容　CONTENTS

ランボー教授・阿部教授が退官
（Retirement of Prof. Rambo and Prof. Abe）……3
東風南信（Reflections）……5
人事（Personnel Changes）……6–7
Colloquium* ……7–8
21世紀COEだより（21st Century COE Report）……8
出版ニュース（Report of Publications）……9
Visitors' Views* ……10–16
海外調査だより（Fieldnotes）……16
連絡事務所だより
（Letters from the Liaison Offices)* ……17–18
*Kyoto Review of Southeast Asia** ……19
研究会報告（Report of Seminars）……20
（* in English）

ランボー教授・阿部教授が退官

今春、A. テリー・ランボー教授が定年退官、阿部茂行教授が同志社大学政策学部へ異動されました。お二人とも、在任期間が短かったにもかかわらず、東南アジア研究センターの歴史の中で特筆すべき足跡を残されました。

ランボー教授は、ミシガン大学の文化人類学科を1963年に卒業され、1972年ハワイ大学で文化人類学の博士号を取得されました。この間、おもにベトナムをフィールドとした文化人類学的調査に従事され、その成果は "A Comparison of Peasant Social Systems of Northern and Southern Viet Nam: A Study of Ecological Adaptation, Social Succession, and Cultural Evolution" として結実しました。本論文はベトナムの地域性にはじめて焦点をあて、ベトナム社会を学際的に考察した、当時としては画期的な論文として高い評価を受けました。

その後、政治的な制約からフィールドをマレーシアに移し、オランアスリの文化人類学的研究に従事すると同時に、東南アジアの熱帯地域を広く対象として、地域社会を自然生態や文化などさまざまな側面から総合的に考察する人間生態学（Human Ecology）の概念を発展させることに尽力されました。また、Human Ecology 関連の資料収集プロジェクトを組織し、およそ1万点におよぶ資料を収集されました。本資料集は Human Ecology File と呼ばれ、ランボー教授の東南アジア研究センター就任とともにセンターに移管され、現在、公開のための準備を進めています。1980年代後半からは、再びベトナムでのフィールド研究を中心にした活動を開始されました。紅河デルタ一村落を対象とした *Too Many People, Too Little Land: The Human Ecology of a Wet Rice-Growing Village in the Red River Delta of Vietnam*（Le Trong Cuc と共著 East-West Center, 1993）や、北部山地を対象とした著作群は、その後の多くのベトナム研究の必読文献と言われています。

ランボー教授が東南アジア研究センター最初の外国人専任教授として着任されたのは2000年11月でした。以来、専門分野からの学問的貢献だけでなく、これまでに築かれた多くの研究者ネットワークを駆使してセンターの人的交流の活発化やさらなる国際化に多大の貢献をされました。

退官記念祝賀会にて。阿部教授（左）とランボー教授夫妻

退官記念講義をするランボー教授

阿部教授は、1970年に大阪大学経済学部を卒業、1977年にハワイ大学より Ph. D（経済学）を取得されました。その後、1977年から1981年までバンコクの国連 ESCAP でエコノミストとして活躍され、1981年から1991年まで京都産業大学経済学部（1987年より教授）に勤められアジア経済論などを担当されました。そして、1991年から1998年まで神戸大学経済経営研究所教授として活躍され、1998年10月に地域発展部門の教授として京都大学東南アジア研究センターに着任されました。

以来、経済学を通じた東南アジア研究の中心的存在として活躍してこられました。とりわけその内外の厚い人的ネットワークを駆使して、タマサート大学との間の拠点大学プロジェクトをはじめ、多くの国際共同研究を組織され、センターの知的存在感のアピールに多大の貢献をしてこられました。また、着任当初より情報化と国際化に力をそそがれ、センターのネットワークシステムの改善・強化、外国人客員公募制度の導入など多くの重要な制度改革を手がけられました。また、2001年に「地域相関動態研究部門」教授となられてからは、副所長の重責を担われ、センター運営の中枢としてなくてはならない存在でした。

阿部教授は、東南アジア経済を、日本やアメリカさらに中国経済と関連させて研究され、直接投資、金融、人口、雇用等をめぐる経済構造の変化を計量経済学で研究されて多くの著書や論文を発表されると共に、経済発展を支える制度に関する研究に関しても学界にその存在感を示してこられました。多くの学会の理事や国際学会誌の編集委員や委員長、さらに国際学会のプログラム委員長を務められ、この分野における国際的な学会で活躍する数少ない日本人であり続けられています。

3月24日、ランボー教授は、京大会館において "Some Reflections on Area Studies" と題する退官記念講義をされました。その後、ザ・リバー・オリエンタルに会場を移し、ランボー教授と阿部教授の退官記念祝賀会が和やかに執り行われました。阿部教授は翌25日のコロキアムで、"Is 'China Fear' Warranted? Perspectives from Japan's Trade and Investment Relationships with China" と題して話題提供されました。

SOME THOUGHTS ABOUT CSEAS

By A. Terry Rambo

I find it hard to believe that my three and one-half years at CSEAS are coming to an end. Despite Kyoto winters and *sugi* pollen, I have immensely enjoyed working at the Center because of its superb research facilities, especially the library, and its capable and invariably helpful support staff. I am especially grateful to my colleagues who have made me feel truly welcome in their midst, despite my lamentable *gaijin* tendency to speak too frankly sometimes. Although CSEAS is already a first class area studies center I would like to take this opportunity to suggest that it might become an even better institution by: 1) increasing its international visibility, 2) strengthening its research collaboration with Southeast Asian scholars, and 3) promoting more interdisciplinary research:

1) The Center has a lower profile internationally than it rightfully should. We don't publish enough in the places that attract attention, nor do we present enough papers at major international area studies conferences. Our flagship journal, *Tonan Ajia Kenkyu,* is a treasure house of useful papers but, unfortunately for foreign readers, many of the most interesting ones are in Japanese. Maybe for the Center's 40th anniversary some of the best of these papers could be translated for a special volume highlighting CSEAS contributions to Southeast Asian area studies.

2) The list of former visiting scholars at the Center reads like an honor roll of Southeast Asian specialists. The program has been immensely beneficial to both CSEAS faculty and the Southeast Asian participants. But it hasn't generated very much collaborative research in which our Southeast Asian colleagues are equal partners in designing the research, collecting and analyzing the data, and writing the reports. In my own experience, working in partnership with Southeast Asian scholars has been vastly more productive than doing research on my own.

3) CSEAS is unique among area studies centers because it includes both natural and social scientists. It hasn't yet taken full advantage of this uniqueness, however. Faculty members tend to work independently on their own individual projects and the amount of truly interdisciplinary research is limited. There are many reasons for this but shortage of time may be the most important. We are so busy with meetings, teaching, and filling out forms that we rarely sit down together and talk informally about our interests. Somehow, time needs to be freed to do that or the Center will not achieve its full potential for interdisciplinary area studies research.

After retiring from Kyoto University, I will join Khon Kaen University in Thailand as a visiting professor in the International Graduate Program on Agricultural Systems. I will also continue my own research in Vietnam. I will not forget my time at the Center, however. Throughout my career I had always wanted to work at a great research university, a wish that was finally fulfilled when I was appointed to the CSEAS faculty. It has been a memorable experience for me. I only hope that I have contributed something of value to the Center in turn.

センターを去るにあたって

教育か研究か、7年か14年か、それが問題だった

阿部　茂行

東南アジア研究センターに来てからは、多くの新しいものの見方を教えられました。去るにあたり、感謝を込めて、エピソードをひとつふたつ、そして今後の抱負を書いてみます。東南アジア研究の先端であるはずのセンターは、着任した当初、コンピュータ環境は惨憺たる状況でした。email がまともに通らない、ホームページが未完、サポートがない、このショックは大きく、すぐに改革をはじめました。普通なら新参者がいろいろと手をつけると反対がでるものですが、みなさん、鷹揚で、ある教授は「阿部は拾いものであった」とコメントし、私がいろいろセンターに合わせるのに大変だというと他の教授からは「いやいやセンターが阿部にあわせるのに苦労している」と揶揄されましたが、どちらもセンター独特の皮肉をこめた励ましであったと勝手に解釈しています。その後、国際化の道筋を打診され、外国人客員の公募、所員会議やコロキアムの公用語を英語とするなど、矢継ぎ早にことを進めました。多くの人を巻き込み、実働と精神的サポートを受け、充実した日々を送ることができました。

『東南アジア研究』の編集も3年間やりました。編集委員間の連絡を email 主体とし、レフェリーも大幅に外国人を採用、英語の特集をいくつか組み、所員会議では何度も投稿を呼びかけ、1号の欠落、遅延もなく任期を終えることができました。研究面では、科研、COE、拠点大学等、多くのプロジェクトに参画し、経済学の領域を超え、幅広くかつ緊密な研究ネットワークを築き上げることができました。ことに拠点大学プロジェクトを通じてのタイをはじめとしたアジアの学者との交流が、今後も私の知的財産となっていくことと思います。

国立大学研究所での12年間にわたる研究生活に終止符をうって、この4月から同志社大学の新設政策学部で、学部1回生を教えることになりました。誘われたとき、教育か研究か、そして7年か14年かという選択を迫られました。教育と14年を選択したわけです。若い人たちに常に接して、いろいろと世界のものの見方、考え方を議論するのは、それなりに刺激があるものです。経済学、東南アジア地域論といった学問の細分野にとらわれることなく、学生とのつきあいはどうしても、大きなものの見方、もっといえば、どう生きるかという問題までも視野にいれておかなければならないようで、全人格的なつきあいが要求されます。苦労もあるが、喜びも大きい、教育重視のそんな船出です。

とはいえ、研究も重要で、これについてはこれまで築いてきたネットワークをより強固にしつつ、期限に追われない、そして地域といった束縛もない自由な発想の研究を心がけていきたく思っています。同志社大学での学究生活はあと14年、短くも長かった東南アジア研究センターでいつか書こうと暖めてきたものを、今後、じっくりと練り上げて、書物に仕上げていきたい、そう思っています。長い間、多方面にわたり、サポートと励ましをありがとうございました。

アジアの環境問題

吉原　久仁夫

東南アジア研究センターに在職したころは経済発展問題に専念し、環境問題は「圏外」であった。しかし現在所属する学部に「環境」がついているので、アジアについての授業で、環境問題についてなにも触れないのは都合悪いと思い少し勉強している。だが、環境問題というのはとらえにくい。

理由の一つは環境問題が数値化できないということにある。経済発展の場合、ドル表示の一人当たり GDP がほとんどの国について分かっており、それを一応、国の発展段階の目安にできるが、それに相当するものは環境問題の場合ない。したがって、例えばインドネシアの環境問題はタイの環境問題と比べてどうなっているのか分からない。それでは国際比較をあきらめて、国ごとの環境問題を知りたいとしても、障害が多い。国民所得統計のように環境に関するデータは集計されていないし、断片的なデータがあっても古い。「環境白書」のようなものを東南アジアで出している国はシンガポールとマレーシアくらいではなかろうか。

ただ、データが皆無だというのではない。国際比較にも使えそうなものもある。例えば、大気中の有害物質の濃度が発表されており（比較可能なデータは1990年代末のもの）、それから各国の状況が少し分かるが、本当に比較可能なものかどうか疑問が残る。例えばタイの二酸化窒素の1立方メートル当たりの濃度は1998年に23ミクログラムだとのことであるが（世界銀行、*2003 World Development Indicators*）、これはシンガポールの濃度（30ミクログラム）より低い。しかしシンガポールは車の総量を規制しており、またロードプライシングも実施しているので、空気がバンコクよりきれいだというのが常識ではなかろうか。発表されている濃度は観測点の平均値であろうから、観測点のとりかたによって、濃度は高くもなり低くもなるので、あまり国際比較には使えないのであろうか。

このようなデータ状況の中で東アジアの国の環境問題をどう把握したらよいかということになるが、上記したように国によっては「環境白書」的な出版物があるし、最近は国際機関、特に世界銀行が環境問題を重視し、中国、インドネシア、フィリピン、タイ、ベトナムについて報告書をインターネットで公表している。もちろん、アジアの環境問題についての文献も豊富になってきているので、これらも参考にしなければならないが、数年前と現在ではかなり大きな変化が起こっている場合があるので、それを知るためにはインターネット上で利用可能な報告書を読むことが必要である。特に国際機関の報告書は国際的な視野からの観察が含まれており、特定の国の環境問題を相対化する上で貴重な資料になることが多い。

私は今までに発表されている文献や報告書を読んで、主要国について環境問題をまとめ、講義録を作成してみた。それをインターネット上で公表している（http://esd.env.kitakyu-u.ac.jp/yoshihara）ので、ご意見をいただければ幸いである。

（1969〜2002 東南アジア研究センター助手・助教授・教授。現在北九州市立大学国際環境工学部教授）

東　風　南　信
REFLECTIONS

チベット見聞

応地　利明

昨夏、やっとチベットに行く機会を得た。もちろんチベットは「開放」されてはいたが、いろんな事情からやっと訪問できた。私には、初めての地域でかなりの日数を過ごすとき、その地域の固有の特性を5つのキーワードで表現しようと試みる習性がある。チベットで考えたのは、次のようなことだ。

1)「世界最大規模の世界最高所にある高位平坦面」

高度を別にしても、これほど広大な高原は世界にはない。インド・プレートの潜り込みによってヒマラヤとチベット高原が形成されなかったら、東南アジアの島嶼部も存在せず、また日本には梅雨もなかっただろう。

2)「内陸アジア草原地帯の南限」

tall grass の恵まれた夏雨型草原は、私のよく見知っている西方アジアのものとは全く異なる。西方アジアの遊牧では、オスは生まれると少数を除いてすぐに肉用に売却される。しかしチベットやモンゴルでは、オスも殺すことなく飼育される。この相違は、仏教とイスラーム・キリスト教の動物思想の違いなんかとは関係なく、ただ草原つまり植生の質の違いによって説明できるのだ。

3)「ヤクの牧畜空間」

このような高所で、ウシ科という大型動物が家畜として飼養されている所はほとんどない。それを可能にしたのが、上記の2特質の結合つまり高位平坦面の恵まれた草地という条件だ。

4)「山岳宗教としてのチベット仏教」

日本や中国では、仏教は平地にある都市とむすびついた宗教だ。しかしチベット仏教は、出家主義にもとづくある種の超俗性を山岳寺院という形で自己表現している。寺院を訪問するためには高位平坦面からさらに山地を登らなくてはならない。その登高路を辿りつつ、ガンダーラの仏教寺院遺跡との類同性を想っていた。逆にチベットに来て、かつてのガンダーラの寺院生活をより一層理解できた。

5)「植民地都市空間」

独立後15年の1962年に、インドに初めて行った。植民地都市のハード面は、その時でも十分に理解できた。しかしかつてのソフト面での在り方は歴史のなかに没し、見ることができなかった。チベットで、植民地時代のインド都市がもったソフトな構成、たとえば英国人とインド人との居住棲み分け、Civil Line（官庁地区）や Cantonment（兵営地区）の機能とその存在の圧迫感などを肌で類推できた。道路標識でも、最初に書かれているのは漢字での表記である。チベットは、日本や朝鮮半島とは異なって、歴史を通じて漢字を採用することはなかった。それが、いま都市に氾濫している。ラサ旧市の再開発も、ナポレオン3世時代のオスマンによるパリ改造計画を彷彿とさせてくれた。治安出動を容易にするための直線大通りの建設である。

（1994〜1998 東南アジア研究センター教授。1998〜2000 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。現在滋賀県立大学人間文化学部教授）

人　事

教官人事

＜所長就任＞

田中耕司教授が所長に再選され、東南アジア研究所所長に就任。任期は2004年4月1日から2006年3月31日まで。

＜新任＞

小泉順子助教授（2004年4月1日付）。
1983年東京大学教養学部卒。91年同大学院農学系研究科農業経済学専攻課程博士課程修了、博士号取得。同年東京大学教養学部助手。93年東京外国語大学外国語学部講師、95年同学部助教授。
〔主要論文〕
The Commutation of *Suai* from Northeast Siam in the Nineteenth Century. *Journal of Southeast Asian Studies* 23(2), 1992.▽From a Water Buffalo to a Human Being: Women and the Family in Siamese History. In *Women, Gender and History in Early Modern Southeast Asia,* edited by B. W. Andaya, Center of Southeast Asian Studies, University of Hawaii, 2000.▽King's Manpower Constructed: Writing the History of the Conscription of Labour in Siam. *South East Asian Research* 10(1), 2002.

＜国内客員部門＞

任期　2004年4月1日～2005年3月31日。

阿部茂行教授
1998年10月～2004年3月京都大学東南アジア研究センター教授。同年4月同志社大学政策学部教授。

浦野真理子助教授
1989年津田塾大学学芸学部国際関係学科卒。94年同大学院国際関係学研究学科博士後期課程退学。同年ジョージタウン大学政治学部博士課程入学。2002年同博士号取得。03年北星学園大学経済学部経済学科助教授。
〔主要論文〕
「ジェラード・ウィンスタンリの思想――反動的との評価への反論を中心に（上；下）」『国際関係学研究』（津田塾大学）No.19 別冊；No.20 別冊，1993;1994．▽Appropriation of Cultural Symbols and Peasant Resistance: A Case Study from East Kalimantan, Indonesia. Ph. D. Dissertation, Georgetown University, 2002.

阿部健一助教授
1984年京都大学農学部農林生物学科卒。89年京都大学大学院農学研究科博士後期課程退学、同年京都大学東南アジア研究センター助手。96年国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手、99年同助教授。
〔主要論文〕
「地域生態史の視点」『地域研究論集』1(2)，1998．▽「神の山のゆくえ――雲南の人と森」『森と人のアジア』（講座人間と環境）山田勇（編），昭和堂，1999．▽*The Political Ecology of Tropical Forests in Southeast Asia: Historical Perspectives.* Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2003.（共編著）

村上勇介助教授
1986年東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒。91年筑波大学大学院地域研究研究科修士課程修了。同年在ペルー日本大使館専門調査員・理事官（政務担当）。95年国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手、2002年同助教授。
〔主要論文〕
「空転する民主政治――1998年アヤクチョの地方選挙にみるペルー政治の実像」『ラテンアメリカ世界を生きる』遅野井茂雄他（編），新評社，2001．▽「ペルーの下層の人々にとって民主主義の持つ意味――リマにおける調査研究からの一考察」『国際政治（特集：「民主化」以後のラテンアメリカ政治）』第131号，2002．▽「1990年代ペルーの政治過程分析に向けた予備的考察――第1期目のフジモリ政治を見る二つの視角」『地域研究論集』4(1)，2002.

外国人研究者人事

■外国人研究員

・Porphant Ouyyanont（タイ）。スコータイ・タマティラート大学経済学院助教授。招へい期間2003年11月1日～2004年5月31日。研究題目「1920年以前におけるバンコクの社会経済発展――首都の誕生」

・Nicola Beth Tannenbaum（アメリカ合衆国）。リーハイ大学社会人類学科教授。招へい期間2004年2月1日～7月31日。研究題目「東南アジア大陸部の宗教複合の研究」

・Poranee Sirichote（タイ）。コンケン大学人文社会科学部助教授。招へい期間2004年2月9日～8月9日。研究題目「東南アジア研究所――タイ語文献オンライン目録データベースに対する利用者満足度調査」

・Ukrist Pathmanand（タイ）。チュラロンコン大学アジア研究所助教授。招へい期間2004年2月10日～8月9日。研究題目「危機後のタイにおけるテレコム資本の政治経済学」

・Khin Lay Swe（ミャンマー）。イエジン農業大学農業植物学科助教授。招へい期間2004年3月8日～9月7日。研究題目「中部ミャンマー乾燥地域における畑作農業発展のための作付体系からのアプローチ」

■招へい外国人学者

・Augustina Situmorang（インドネシア）。LIPI 人口問題研究センター研究員。2003年11月29日～2004年1月 ↗

上村昭男専門員と美馬敏男会計掛長が定年退職

2001年4月に東南アジア研究センターに着任され、3年間東南アジア研究センターと大学院アジア・アフリカ地域研究研究科のためにご尽力いただいたお二人が、3月末日をもって定年を迎えられました。

上村専門員は、1963年（昭和38年）京都大学工学部に就職、その後、霊長類研究所庶務掛長、入試課教務掛長、研究協力部留学生課専門員等を歴任されました。また、美馬会計掛長は、1962年（昭和37年）京都大学附属図書館に就職、その後、北海道演習林事務掛長、医学部経理掛長、薬学部会計掛長等を歴任されました。お二人は、京都大学の法人化と東南アジア研究センターの附置研究所への改組という大きな変革の時期にあって、数多くの激務をこなしてこられました。

3月25日、京大会館で歓送会が開催されました。教職員ならびに院生が大勢参加して、誠実なお二人に感謝し、別れを惜しみました。

歓送会で花束を贈られる上村専門員（左）と美馬会計掛長（右）

12日。「日本とインドネシアの高等教育女性の婚姻への対応変化」

- Sugiah Mugniesyah（インドネシア）。ボゴール農業大学女性研究センター研究員。2003年12月17日～2004年3月15日。「ジェンダー：貧困と持続的農業発展―インドネシア西ジャワの経験」
- 近藤まり（日本）。アジア経営大学院助教授。2004年1月1日～6月30日。「フィリピンにおけるイスラム金融」
- Addinul Yakin（インドネシア）。マタラム大学農学部上級講師。1月5日～6月4日。「持続的開発推進のための環境行政の実行と施行：日本とマレーシアの例から学ぶ」
- Zamroni Salim（インドネシア）LIPI経済研究センター研究員。2月6日～3月23日。「日本とインドネシアの産業間貿易」

事務官人事

□上村昭男専門員は、3月31日付けで定年退職。後任に山本正躬学生部教務課教務掛長。

□美馬敏雄会計掛長は、3月31日付けで定年退職。後任に竹内照夫医学部附属病院管理課給与掛長。

□潮崎晴之教務掛主任は、4月1日付けで奈良女子大学国際課留学生係長に昇任。後任に今井知子研究協力部国際交流課国際企画掛員。

Colloquium

◎2003年10月23日「システム運用上の情報セキュリティポリシー」木谷公哉

情報資源を取り扱う上でコンピュータを利用した情報処理が不可欠となりつつある。その情報処理を支えるための情報基盤を整備することが求められるが、多様化するシステムによってその運用が特にセキュリティという観点から難しくなってきているのが現状である。現在、インターネットという、国という枠組みを超えた巨大な共有通信網は、情報機器を通じての交流や情報共有、またはショッピングなどの電子商取引等、その用途が計り知れないほどの社会基盤となりつつある。しかしその一方、比較的容易にコンピュータウィルスや不正侵入等によって被害が甚大なものとなってしまう。

本コロキアムでは、組織内における情報セキュリティポリシーを考える上で何に着眼して、それをどのように事前防御すべきかを議論することが目的であり、私はモバイル端末の防御とその使用者のセキュリティ意識に着眼した。

セキュリティ防御に100％は存在しないことは周知の事実であるが、それに近づけることは可能である。研究を妨げずにセキュリティをいかに強固にするかは、進化する情報技術において常に問いかける必要があるだろう。

◎"Cooperative Activity and the Farmer Economy in the Development Process of the Red River Delta, Vietnam" by *Yanagisawa Masayuki*, November 27, 2003.

This study focused on the "farmer economy," which includes all of the famers' economic activities, and on the "cooperative economy" as managed by the cooperative (*hop tac xa*) as a part of the farmer economy. The purpose of the study was to show changes in socio-economic structure by analyzing the relationship between the two economies at the cooperative level in the Red River Delta. The study period was the 1980s–1990s, an era characterized by repeated reforms in the agriculture production system of the Red River delta and the intrusion of the market under the policy called Doi Moi. The study site was the Coc Thanh cooperative in Nam Dinh province.

Farmers' payments to the cooperative were rather consistent during the 18 years from 1981 to 1998, ranging from 22 to 32 percent of actual rice production. This shows the contract system of the early 1980s to have been more flexible, in terms of farmers' economic activities, than might be imagined from the term "contract system." The cooperative gained more income from farmer donations and the cooperative's own enterprises, which enabled it to invest in infrastructure improvement, such as the construction of a bridge, road, canal, and school, and to engage in welfare works like the distribution of food to the poor. The cooperative organization, which consistently occupied a certain percentage of the farmer economy, was found to be a bridging organization between the farmer economy and the outer world.

21世紀 COE だより

マカッサル・フィールド・ステーション
――インドネシア東部地域研究の拠点

マカッサル市はスラウェシ島南西半島部に位置する港市である。インドネシア東部地域最大の商業都市にふさわしく、海と陸の産物が集散する。サンゴ礁やマングローブの林はスラウェシ島を縁取り、養魚池が海と陸を結ぶ。沿岸の平野部から内陸部にかけては豊かな水田が広がり、コーヒーや茶の栽培もおこなわれている中央部山地の森林へと風景は移り変わる。一見、穏やかな生態環境の中に人びとの生活が静かに営まれているような光景が思い浮かぶかもしれない。しかし、スラウェシ島をはじめ、インドネシア共和国は今、1990年代末から着実に進められている地方分権による社会変容の時代を経験している。マカッサル・フィールド・ステーション（MFS）は、この社会変容を、生態環境利用をめぐる人と社会の相互関係に注目しながら観察・研究する院生の研究活動支援を目的として発足したものである。

MFS では、2002年度からは毎年、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）の大学院生を調査研究活動のために派遣している。2003年8月には、マカッサル市内にある国立ハサヌディン大学（UNHAS）構内に、同大学大学院との共同研究および ASAFAS 大学院生の調査研究活動の基盤となる研究室を開設した。研究室内には会議室のほか、パソコンやスラウェシ島に関する基礎文献図書を整備している。派遣された大学院生が UNHAS の教官や大学院生たちと研究会議を開いたり、プレゼンテーションを行ったりするためである。さまざまな画像処理を行うためのソフトの整備や、生態環境利用の現状の記録をビデオカメラで撮影したものを再生し、みなで討論するための設備も整えられている。

このような共同研究の環境整備を実現した背景には、MFS が、大学院生の調査研究活動支援や教育だけにとどまらない地平線に視野を据えているという特色がある。現行の21世紀 COE プログラムにおける調査成果を出すことに加え、これまで行われてきたスラウェシ地域研究あるいはインドネシア東部地域研究の蓄積をフィールドの現場にフィードバックしながら、さらに地域研究を深化させることを念頭に置いているのである。MFS では、日本とインドネシアの双方の教官も、臨地研究の場に積極的に参加することを実践している。ASAFAS 院生の研究活動支援を基軸とした地域研究の場として、確かな歩みを築いている。

（文責：非常勤研究員　濵元聡子）

◎"Reconsidering '*Family*' in the Southeast Asian Context: A Proposal" *by Hayami Yoko*, December 18, 2003.

What kinds of changes are taking place today in the realm of the "family" in Southeast Asia? How can we compare these changes with our own society where the "modern family" is said to be breaking down? I say this because there is a too easy tendency to seek "the modern family" in Southeast Asia. Is there any way in which we can, through the study of Southeast Asia, relativize the "modern family" and usefully compare the changes taking place in Southeast Asia? In this colloquium, drawing upon some previous findings including my own, I drew an outline for a future project of investigation. Some studies from Southeast Asia have successfully demonstrated the unbounded nature of the "family" or "domestic" realm. Such argument has been made by those interested in social organizational principles in Southeast Asia, as well as by feminist scholars who have attempted to break down existing categories. On the other hand, in many of the nation states, official discourse has often drawn upon the "family" for ideological foundation for a developing nation state. Media images also abound with pictures of "modern" family and women's roles within. What are the local responses to some of the ideological apparatuses and institutions that are set up in this process of constructing the family as a unit of modern nation state? What kinds of differences and gaps can we observe between such institutionalized family realities and reality on the ground?

◎"Risk Assessment of Vibrio Pathogens in Seafood in Thailand and Malaysia: An Emerging Food Safety Issue in Southeast Asia" by *Nishibuchi Mitsuaki*, February 26, 2004.

Food safety is becoming a very important global issue. One of the targets of the WHO and FAO's microbiological risk assessments is vibrio pathogens in seafood. *Vibrio parahaemolytiucs* in finfish and shellfish, *Vibrio cholerae* in shrimp, and *Vibrio vulnificus* in oysters are considered particularly important. I reviewed the recent pandemic (worldwide) spread of infections by a newly emerged clone of *V. parahaemolyticus*. The infection was reported from eight Asian countries. We detected for the first time in the world the pandemic clone from molluscan shellfish in southern Thailand and we performed a risk assessment on this subject. It is very rare to detect virulent strains of *V. cholerae* from seafood but we detected virulent strains of *V. cholerae* from shrimp and other seafood marketed in Malaysia at very high frequencies in our study between 1998 and 1999. Subsequent molecular epidemiological analysis indicated that the virulent strains could be separated into two groups that appear to have been introduced independently from the Bengal area. One group belonged to a cluster unique to the Thailand-Malaysia-Laos region, and this group may have persisted in this region for a long period. The other group appears to have an origin and route of introduction different from those of the other group.

◇『東南アジア研究』41巻3号
Southeast Asian Studies 41(3)
A Narrative of Contested Views of Development in Thai Society: Voices of Villagers in Rural Northeastern Thailand. Ratana Tosakul Boonmathya▼Burial Goods in the Philippines: An Attempt to Quantify Prestige Values. Grace Barretto-Tesoro▼The Shifting Role of Large Livestock in Northeast Thailand. Suchint Simaraks, Sukaesinee Subhadhira, and Somjai Srila.▼「未完の党＝国家――ネー・ウィンとビルマ社会主義計画党」中西嘉宏▼「スハルト体制崩壊後のインドネシア政治エリート――1999年総選挙による国会議員とはどのような人たちか」森下明子▽書評（Book Reviews）Jean Michaud, ed., *Turbulent Times and Enduring Peoples: Mountain Minorities in the South-East Asian Massif*. A. Terry Rambo▼山崎修道監修；小早川隆俊編著.『新版　感染症マニュアル』西渕光昭▼佐藤寛編.『援助と社会関係資本――ソーシャルキャピタル論の可能性』藤田幸一▼Yuri Sadoi, *Skill Formation in Malaysian Auto Parts Industry*. 吉原久仁夫▽現地通信（Field Report）「オアシスの風と嵐」古川久雄

◇『東南アジア研究』41巻4号
Southeast Asian Studies 41(4)
Sustainable Agro-resources Management in the Mountainous Region of Mainland Southeast Asia
Preface. Kono Yasuyuki and A. Terry Rambo▼Use of Natural Biological Resources and Their Roles in Household Food Security in Northwest Laos. Yamada Kenichiro, Yanagisawa Masayuki, Kono Yasuyuki, and Nawata Eiji▼From Forest to Farmfields: Changes in Land Use in Undulating Terrain of Northeast Thailand at Different Scales during the Past Century. Patma Vityakon, Sukaesinee Subhadhira, Viriya Limpinuntana, Somjai Srila, Vidhaya Trelo-ges, and Vichai Sriboonlue▼Nutrient Balances and Sustainability of Sugarcane Fields in a Mini-Watershed Agroecosystem of Northeast Thailand. Vidhaya Trelo-ges, Viriya Limpinuntana, and Aran Patanothai▼A Nutrient Balance Analysis of the Sustainability of a Composite Swiddening Agroecosystem in Vietnam's Northern Mountain Region. Tran Duc Vien, Nguyen Van Dung, Pham Tien Dung, and Nguyen Thanh Lam▼Impact of Agricultural Practices on Slope Land Soil Properties of the Mountainous Region of Northern Vietnam: A Case Study in Bac Ha District, Lao Cai Province. Sakurai Katsutoshi, Kawazu Hiwasa, Kono Yasuyuki, Yanagisawa Masayuki, Le Van Tiem, Le Quoc Thanh, Nittaya Dangthaisong, and Trinh Ngoc Chau▼Soil Fertility and Farming Systems in a Slash and Burn Cultivation Area of Northern Laos. Watanabe Etsuko, Sakurai Katsutoshi, Okabayashi Yukoh, Lasay Nouanthasing, and Alounsawat Chanphengxay▼Intensification of Shifting Cultivation by the Use of Viny Legumes in Northern Thailand. Somchai Ongprasert and Klaus Prinz▼Some Key Issues Relating to Sustainable Agro-resources Management in the Mountainous Region of Mainland Southeast Asia. Kono Yasuyuki and A. Terry Rambo▽書評（Book Review）植木真理子著.『経営技術の国際移転と人材育成――日タイ合弁自動車企業の実証分析』辻井洋行

出版ニュース
Report of Publications

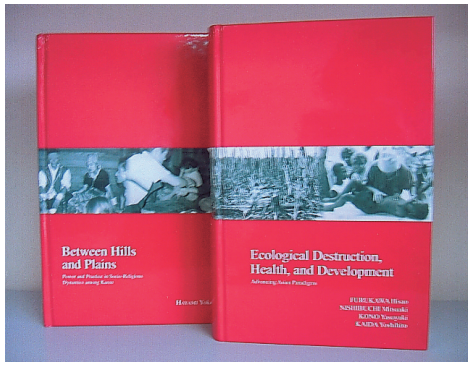
◇Kyoto Area Studies on Asia Vols. 7 and 8.
■Hayami Yoko. 2004. *Between Hills and Plains: Power and Practice in Socio-Religious Dynamics among Karen.* Kyoto University Press and Trans Pacific Press.
■Furukawa Hisao, Nishibuchi Mitsuaki, Kono Yasuyuki, and Kaida Yoshihiro, eds. 2004. *Ecological Destruction, Health, and Development: Advancing Asian Paradigms.* Kyoto University Press and Trans Pacific Press.
◇研究報告書シリーズ（Research Report Series）
■No.99. Rosnah Suliman, compiled. 2003. *Internet Resources on Southeast Asian Studies: A Bibliography.*
■No.100. Salvacion M. Arlante, compiled. 2004. *Non-English Materials on Philippine Studies at CSEAS Library: A Research Guide.* Part I–III.

Kyoto Area Studies on Asia シリーズ

京都大学学術出版会と Trans Pacific Press が共同出版を始めて早3年を経、今年も大部の2冊が刊行された。速水洋子著 *Between Hills and Plains: Power and Practice in Socio-Religious Dynamics among Karen*（Vol.7）と古川久雄、西渕光昭、河野泰之、海田能宏編著 *Ecological Destruction, Health, and Development: Advancing Asian Paradigms*（Vol.8）である。

Between Hills and Plains は、長年のフィールドワークに基づき、タイ、ビルマ国境に住むカレンの宗教実践を国民国家のもとでのマイノリティとしての形成および位置と関連させて論じた詳細な民族誌である。*Ecological Destruction, Health, and Development* は、2001年11月に開催された COE シンポジウムの発表論文をもとに編まれた論文集である。生態学、農学、医学、開発学など環境問題に関わる専門家が一堂に会し、東南アジアとその周辺地域における近年の急激な環境変化を、地域住民の生活や生業、そして地域社会に立脚した視点から捉え直した初めての試みと言える。

どちらも現代の東南アジアが抱える重大な問題を、フィールド調査に基づく確かな知見から解明しようとする意欲作である。購入に関する問い合わせは、京都大学学術出版会（電話 075-761-6182, E-mail: sales@kyoto-up.gr.jp）まで。



VISITORS' VIEWS

JAPAN — A TIGHTLY STRUCTURED SOCIAL SYSTEM?

By Nicola B. Tannenbaum

"This isn't Thailand," I said to myself on the first morning in Kyoto. I can't read or talk here like I do in Thailand. There are a lot of signs in romaji but they don't really help. I feel like a displaced *farang* (Thai for westerner) rather than a *gaijin.* I was glad I had packed coffee and a mug and grateful to Hayashi-sensei for bringing a thermos hot water heater — I drank my coffee and ate a few fig newtons (left over airplane food) and tried to settle into my space at Shugakuin. Hayashi-sensei sent two of his students to help me and I was taken shopping and the next day led to the Center for Southeast Asian Studies.

I started thinking about John Embree's famous essay, "Thailand — A Loosely Structured Social System" (1950, *American Anthropologist* 52:181–193; reprinted in *Loosely Structured Social Systems: Thailand in Comparative Perspective,* 1969). Embree went to Thailand soon after World War II, as a U.S. Cultural Attaché in Thailand. Prior to that he had done fieldwork in Japan and he is probably most well-known for his ethnographic research in Suye Mura, Japan. Embree, drawing on his experience in Japan, was so struck by the apparent lack of organization and coherence in Thai social and cultural activities that he classified Thai social organization as loosely structured in contrast to the tight structures of Japan, Vietnam, and China. The essay is Embree's response to his "this isn't Japan" reaction. I received a request for an essay for Center's newsletter and I thought, well, I could try doing an Embree in reverse, "this isn't Thailand."

What struck Embree about Thailand was the emphasis on individuality—the ability to choose to follow or not to follow rules about how to behave; that in the household, children owed their father respect and obedience but the father also had responsibilities to the children and that children could and did choose not to obey parents with seemingly little consequence; and the lack of cohesive and coherent groups that persisted through time. Related to this was the lack of concern about the property of others and what he described as, "the utter insecurity of physical property" (p.9). Another striking contrast was the importance of fun (*sanuk* in Thai) in both daily life and work and the fact that work and education were not intrinsically good but were for extrinsic goals such as prestige, status, or fun. I suspect his analysis was both a reaction to the differences between Japan and Thailand and also to the political situation in Bangkok where the Thai government was particularly fluid given its support of both Japan and the Allies. The 1969 volume was a critical reaction to Embree's characterization of Thailand and Embree's analysis was the theoretical impetus for anthropologists beginning to work in Thailand.

Some caveats: this is my first time in Japan (the numerous trips through Narita don't count); I have been here about a month now so these are first impressions, not the results of careful scholarly research; I have little knowledge of the history, economy, or anthropology of Japan; Embree's characterization of Thailand and his knowledge and understanding of Japan are products of a particular point in time and his experiences in Bangkok compared to those in a farming village; and my reactions are also a product of this particular point in time, and, like Embree, I am comparing primarily village experiences with urban Kyoto. (The headings come from some of Embrees's contrasts.)

Time control and the importance of work. What struck me first is that adults hurry; I've seen grown ups running, not as exercise (though I've seen that, too) but to catch a bus or a train, maybe, or because they are late to work. In Thailand, only children run; adults may run for exercise, but otherwise not. People work late in Japan — here at the Center, while the building is locked at 6:00, people in the offices stay and work late. Ideally, we know who is at work because the names on the office directory are turned to the white side when we're in and reversed to the black when we leave (something I still often forget to do). And we know where people are because of the signs on our doors: home, back soon, out of town, in and so on. Still work, at least academic work, seems to be an intrinsic reward — though this is true in most academic environments including, contra Embree, Thailand. Vending machines. I don't think I've seen a vending machine in

Thailand. Here there are vending machines for: cigarettes, soft drinks, beer, sake, batteries, rice, and maybe more. I don't know why all these machines. To save time? Operating vending machines are a source of small and steady income? Impersonal relations with a machine rather than personal relations with a small shop vendor as in Thailand?

Group vs. individual. Traffic respects both bicycles and pedestrians. I am not used to people giving bicycles the right of way or pedestrians obeying the walk/don't walk lights (most of the time) and cars stopping for pedestrians in the zebra crossings. In Thailand the larger the car the more the right of way and cars in general have the right of way, or so it seems to me as a pedestrian. There is very little litter. People have flowers set out in front of their houses and on the sidewalk and there they safely stay. Obeying rules? Maybe. There are signs in many places saying bicycle parking here is forbidden, but if you park here and your bike is taken away, the signs also tell you where to go to redeem your bike and the fine you must pay.

The network of social relationships here and in Thailand are built on exchange. Exchange of politeness, favors, gifts. Relations are constructed and maintained by these gifts. I think Embree missed this in Thailand because of the fluidity of politics at the time and his distance from the countryside where these exchanges exist, perhaps less formally than in Japan, but with a compelling reality.

Fun. Japanese may in general work hard but there is still an emphasis on fun—after a talk or a seminar there is a dinner and drinking and good conversation. It seems that this is an important aspect of these seminars. Or a meeting that includes a side trip to look at the countryside for foreign visitors who haven't seen much of Thailand. Not just work but fun.

So is Japan a tightly structured society? I don't know—I think Embree was looking at the formal relationships that appear tightly structured and missed the flexibility in the application of these rules and the room for negotiation. Does this make Thailand and Japan loosely structure societies? I don't think so. Embree didn't imagine the structure and organization in Japan; the orderliness implied by the rules also exists most of the time. For Thailand, Embree saw the way people used the rules and their negotiation in a time of political and social flux and missed the underlying order and sets of obligations that structure the relationships among individuals and groups. Are Japan and Thailand then the same? No. The different sets of rules, values, and goals and the ways these are worked out in their differing historical, political, and economic contexts suggest different forms of social and cultural organization arising from different, but perhaps, related roots. After all, linguists now suggest that the Tai and Japanese languages are related.

(Visiting Research Fellow)

THAI CAPITAL IN POST-CRISIS THAILAND: THE CASE OF THE CP GROUP

By Ukrist Pathmanand

Before I revisited the Center for Southeast Asian Studies this February, I heard from a prominent Thai scholar the important news that Mr. Thanin Chearavanond, owner and Chief Executive Officer of Chareon Pokphan group, had informed his close friends that he would like to retire. Why would the top business elite in Southeast Asia want to retire before the age of 60? This is abnormal. Why has the end of an era—the career of the most successful billionaire in Southeast Asia—come too early?

A possible reason is that in a very complicated global and domestic political economy, he can not manage any better solution for his family business empire. What is the domestic and global environment of his business empire?

The business section of Matichon newspaper on 11 February 2004 reported a rumor circulating in stock trading rooms that Shin Corporation (SHIN), the holding company of the biggest telecommunication empire in Thailand, would take over TelecomAsia (TA), a flagship telecommunication firm of Chareon Pokphan group (CP). The top executives of both companies denied the rumor, even officially reporting to the Stock Exchange Commission that it was not true and that there was no consideration of such a sale. However, this news had a strong negative effect on TA's share price, which decreased dramatically from 9 baht/share to 0.80 baht. This decline in share price resulted in a massive buying of TA's share which yielded short-term profits to the amount of 821.04 million baht by the end of the day.

There was more bad news for CP. As the biggest agro-industry company in Southeast Asia, CP is a fertilizer producer, animal food meal producer, raw and boiled chicken exporter, and shrimp exporter. It was therefore likely to be affected by world trade disputes involving tariff and non-tariff

barriers. Thailand's shrimp exporters have been recently accused by the US trade representative of dumping, and CP shrimp inevitably suffered from this dispute. CP also continues to reel from the devastating economic consequences of the avian flu. All together, the stock price maverick game, the trade disputes with the US, and the global epidemic provide a good explanation of the risks Thai capitalism faces in the post-crisis period, at a time when global capitalism seems to become more and more uncontrollable. Let me elaborate.

Global Epidemic

One might say that the avian flu has become an innovator in global diversification, moving from China to Indonesia and from Vietnam to Canada. The epidemic has had a direct effect on many large Thai corporations, with its first impact felt by CP's Hong Kong operations in May 1997. This first outbreak of bird flu came from chicken farms in the three southern Chinese provinces of Guangdong, Yun Nan, and Quang Xi. In southern China, the virus effected chicken consumption and production and quickly penetrated to Hong Kong. It was disastrous to Hong Kong, a market that imported 789,224 tons of chicken from China yearly, 99.6% of its chicken imports. The outbreak cost HK 6,440 million dollars.[1] China lost the Hong Kong market, where it had a near monopoly, as well as Japan, where Chinese chicken had become a major import through the years. Within Hong Kong, avian flu seriously hurt CP business activities, affecting the value of its stocks on the Hang Seng market.

CP's travails did not end there. As avian flu virus S5N1 spread to Vietnam and into half of Thailand's 76 provinces, it was also inevitable that CP's domestic operations would be hurt. The Trade Association of Thailand (TAT) estimated that if the government cannot control avian flu within three months, chicken feed and other related industries stand to lose 40 billion baht, largely as a result of Japan and the European Union banning the import of Thai chicken.[2] The decline of the chicken industry will resonate in sectors whose products are closely linked to chicken production. The price of animal feed meal, such as maize and soybean, have already declined as a result of the slaughter of chickens in infected provinces and decreased demand from the chicken industry. CP will likely suffer the most since it is not only a major chicken exporter to Japan and the European Union, but is also the biggest animal feed meal producer in Thailand, China, and Taiwan—all three countries which have been affected by avian flu.

When asked how he planned to cope with the impact of avian flu, Mr. Thanin Chearavanond gave the strange reply that he could not stop birds flying from Mongolia to Vietnam and Thailand in the winter.[3] His answer may be interpreted as an admission that in a region where consumption had changed considerably from the agricultural to the urban and commercialized, the capitalist is caught in a dilemma: greater demand for meat, including chicken and other fowl, means converting more agricultural land to poultry farms, but it also opens the capitalist to the threat of a fast-moving avian flu virus. This is most likely what Mr. Thanin meant when he gave that strange response.

A More Complicated Thai Political Economy

Despite this unpredictable global epidemic, the financial crisis in 1997 still remains the most significant watershed for Thai capital groups. It not only marginalized the weaker capitalists from the market, but removed barriers that once imposed foreign ownership limitations in significant service sectors like finance and banking, insurance, the retail market, and hotel management. The crisis forced conglomerates like TA to restructure debt and reorganize to ride out the crisis. Its strongest competitor, the Shin Corporation, was not seriously affected. It has therefore emerged much stronger than TA and was able to invest in quick profitable business projects in the entertainment business and telecommunications. Shin Corporation is the first telecommunication company which now owns a television station, the ITV. It has launched a new satellite program called IPSTAR, which has a wide viewership from India to Australia, China to Indonesia. This year Shin Corporation is scheduled to launch its M-Link Asia, another mobile phone provider, while expanding its operations into real estate (via its SC Asset). Meanwhile, TA of CP remains stuck in a rut, its large debts preventing it from modernizing its telecommunications operations away from sole reliance on landline telephone networks.

The aggressiveness of Shin Corporation, backed by political power and quick monies from the stock market, has now prompted rumors of its inevitable takeover of another telephone system belonging to TA. If this rumor turns out to be true (and most likely it is), the eventual increase in the power of Shin Corporation will signify a major development in Thai capitalism as big corporations compete more aggressively. It also means that political power has

shifted back to Thailand. CP, which once believed in the theory that political influence from overseas Chinese tycoons was decisive, appears to be at the losing end. The secret political financier of the past has been replaced today by a Thai billionaire seizing control of parliament.

Farewell to CP.

Notes

1) "CP's Taiwanese Interests Will Fill Void in Hong Kong Market," *Bangkok Post*, January 8, 1998: 10; and Sutha Visetsuwan, "CP Rescheduled to Export Chicken to Hong Kong," *Manager Daily*, January 8, 1998: 1.
2) Benjaprut Akkarasriprasai, "Bt 40 bn in Chicken Sales at Risk," *The Nation*, February 12, 2004.
3) *Bangkok Post*, January 22, 2004.

(Visiting Research Fellow)

THAI URBANIZATION IN PERSPECTIVE

By Porphant Ouyyanont

I am grateful to have the opportunity of conducting research at Kyoto University Center for Southeast Asian Studies and to continue my work on various aspects of the economic history of Thailand. For some years I have made a particular study of the economic history of Bangkok, and feel that an understanding of urban history is important for an understanding of the process of economic development generally. In this brief essay I will make a few comments on Bangkok's position in Thailand's development as seen in comparative perspective.

Bangkok is, and has long been, what is termed a "primate" city—a city of overwhelming dominance in terms of size and economic significance. Primate cities are not unusual in developing countries, although the extent of Bangkok's dominance during the second half of the twentieth century was surely without parallel. For example, in 1947 Bangkok was 20 times the size of the country's second largest city, Chiang Mai. By 1970 the ratio was 35 to 1 and 10 years later had reached 55 to 1. Around 1960, Bangkok's population was nearly 10 times the combined populations of the next 4 largest cities. In Indonesia, Jakarta was about equivalent to the next 4 combined, while in Malaysia, Kuala Lumpur had less than two-thirds the combined populations of the next 4 cities.

It is interesting to consider this urban structure in a longer historical perspective. In some ways, Bangkok in modern Thailand has a role not unlike that of London in the eighteenth century. In the 1750s, on the eve of the Industrial Revolution, London, like Bangkok two centuries later, held about 10% of the nation's population, was easily the largest port for both imports and exports, was the leading manufacturing center and source of consumption, was larger than the second largest city by a huge margin, was the seat of government and a host of institutions, and so on. London then had a population of some 670,000; second was Bristol with only 45,000 and then Norwich with 35,000. Outside London only four English cities had more than 30,000 inhabitants. In England, though, industrialization brought the rise of many other urban centers, and the relative diminution of the economic dominance of London. In Thailand, industrialization enhanced the primacy of Bangkok.

What of other early developers?

In sharp contrast to both England and Thailand, Japan was long a country of significant urban centers. Extraordinarily, Japan held three of the world's ten largest cities at the end of the eighteenth century. Tokyo (Edo) was the largest (perhaps the most populous in the world around 1800, with around one million inhabitants according to some estimates), but there were several other large cities. For example, Osaka and Kyoto both apparently had populations of over 350,000, and Nagoya, Kanazawa, Kagoshima, and Sendai all had over 60,000.

In this respect Japan was more like the Netherlands than England. Seventeenth-century Netherlands had several significant urban centers, and the largest, Amsterdam, could hardly be termed a "primate city." By around 1750, when Amsterdam's population was perhaps 200,000, Holland (without Belgium) had four or five other cities with populations over 40,000, and several more with populations above 20,000.

In this short essay I have no time to comment on these varied matters in detail, but I would like to make a few observations.

First, we must understand the rise of industrial urban centers in England in terms of the availability of raw materials, especially coal and iron. Thailand's industrialization was not dependent on raw materials, and important factors in Thailand's case were labor supply and access to foreign markets. In England, the rise of new urban centers was propitious for economic growth. The new centers brought transport links, attracted immigrants from the countryside, developed their own merchant classes and sources of capital, and acted as growth poles for the

surrounding regions. Thailand, with a different pattern, could not benefit in this way. In both Japan and the Netherlands, it would appear that pre-industrial urban centers promoted economic growth. Such centers encouraged internal trade, transport links, the rise of independent merchant classes, the accumulation of local capital, and in other ways fostered economic change. Thailand, with virtually no significant urban center outside Bangkok until the last two or three decades of the twentieth century, could not benefit from the economic spur that comes from a cluster of sizeable cities.

My tentative suggestion is that Thailand's pattern of urbanization may well have been unfortunate for the economic development of the country as a whole. The Thai economy was long characterized by an overwhelmingly rural population, inadequate or absent road systems, and rural poverty. If large towns act as growth poles for the surrounding region, such an impetus to growth was certainly absent for much of Thailand until very recent times.

(Visiting Research Fellow)

REHABILITATION OF MANGROVE FORESTS

By Pipat Patanaponpaiboon

Mangrove forests are occupied by a unique group of trees or shrubs growing on the intertidal zones of tropical and subtropical estuaries, creeks where the salt water reaches. They connect the terrestrial ecosystem together with that of the aquatic. Moreover, they perform as barriers against coastal erosion and produce new mud flats along the shorelines. Because the mangrove forest is naturally affected by a long hydro-period of daily tides, its substrate is forced into an anaerobic condition and a high concentration of salinity.

In order to survive the stress of saline and anaerobic conditions, mangrove plants have made physiological and morphological adaptations. Unlike terrestrial plants, mangrove plants have developed many kinds of aerial roots to mechanically support the tree body and carry out gas aeration for the submerged roots. The *Rhizophora* species shows stilt roots, which branch out from the trunk and bend down to the substrate like an arch. Pneumatophores are generally found in *Avicennia* and *Sonneratia*. The anaerobic substrate of the mangrove habitat leads to a slow composition rate of soil microbes. So mangrove forests produce many roots, showing high primary productivity below ground. The mangrove forests are characterized as a major carbon sink ecosystem, which is ecologically important with respect to global climate change. Preliminary research on mangrove forests suggests further study based on ecological theory for better prediction of how they will respond to global climate change.

Furthermore, as mangrove forests settle in the estuaries where abundant sediments accumulate through upstream flows and daily tides, they act as a nursery for juvenile aquatic animals. Many of these aquatic animals are commercially valuable, i.e. sea bass (*Lates calcarifer*), muddy crab (*Scylla serrata*), and black tiger shrimp (*Penaius monodon*). The abundance in aquatic animals attracts kingfisher birds to the mangrove forests. This diversity of animals and the unique vegetation type gives mangrove forests the potential for ecological tourism, further merit for their conservation.

Therefore, the mangrove forests are recognized as a valuable ecological and economic resource. In the last few decades, mangrove forests in Southeast Asia have been exploited by charcoal and timber production, tin mining, coastal industrialization and urbanization, and coastal aquaculture like shrimp farming, which has a significant impact on the decreasing forests. Recently, a geographic information system (GIS)-based tool was introduced to examine different coastal development and management scenarios and their implication for the status of mangrove forests in terms of diversity and value.

Mangrove rehabilitation or restoration is an effective option that has been initiated successfully in various destroyed areas of mangrove forest. However, it is remarkable that the rehabilitation of mangrove forest is not easy. Previous rehabilitation was mostly carried out by trial-and-error, and the available information on rehabilitation is mostly available for *Rhizophoraceae*. Failed mangrove forest rehabilitation is probably due to inadequate site assessment or an improper species of mangrove seedlings being planted in the defined area. The soil elevation and flooding regime should be also taken into consideration. Pre-treatment of the rehabilitation area is sometimes called for where the substrate is in poor condition, for example, in the convex-concave areas left after tin mining or the hard, packed soil resulting from sediment in abandoned shrimp ponds. Although mangrove rehabilitation appears to be possible, restoring the complexity of animals and microbial components is still questionable.

To deal with the problem of mangrove forest degradation, increasing public awareness of the true value of this forest is recommended. At the same time, the success of the mangrove rehabilitation depends upon closer cooperation by local communities. Fostering appreciation of the conservation values of mangrove forests requires management procedures that are capable of compromise or that can combine traditional utilization with conservation objectives. It is suggested that an optimal-wide green belt of mangrove forest along the shorelines should normally be present in a good condition. The area behind the green belt can be provided for traditional utilization in a sustainable and environment-friendly manner. (Visiting Research Fellow)

A LOOK BACK TO MYANMAR

By Aung Than

One sees more, more as a whole, and with a non-judgemental attitude when one looks back from afar. The case in point here is the issue of Myanmar's resource use, which is becoming more and more controversial. The natural resources of Myanmar are vast and diverse. Managing them to last unimpaired so that future generations can continue to enjoy the same fruits and pursue the same sustainable development is a formidable task. Many resource rich countries are currently exerting effort to achieve this goal with varied results.

Myanmar's current resource management scenario indicates a vicious circle of natural resource dependency, technical underdevelopment, poverty, more resource dependency and deprivation, and more poverty. People are trapped in this whirlpool, which is exacerbated by recurring economic and political turmoil. Fundamentally, the wisdom and resolute will of the country's leaders are crucial in the effort to escape such a whirlpool of poverty.

Myanmar is still internationally recognized as resource rich. Forest resources are one of her riches with 52 percent of the country still under natural forest cover and a relatively high per capita forest area of 0.8, compared to the Asian average of 0.2. The Myanmar Selection System, currently being adopted, is an ideal tropical forest management system tested successfully through the last century and proven by remaining sizable natural forests and sustainable yield. The nation's foreign exchange need is largely apportioned with the forestry sector contributing the highest share of export earning in the last two decades, the peak being 43 percent in 1986–87. Additionally, at least 72 percent of the populace has been very dependent upon forests for their livelihood. Such a significant role has the forestry sector played for more than a century and so much more critical is the need today for primary forest products by government and people alike, that the forests of Myanmar could be driven to the brink of total destruction if sustainable objectives are not truly pursued. Concern about this critical issue is indicated in the *State of the World's Forests 2003*, recently published by the FAO.

The major issue of concern to the world community is Myanmar's highest and increasing rate of deforestation (500,000 ha or 1.4 percent yearly in the decade 1980–90, compared to the Asian average of 0.05 percent and the world's average of 0.24 percent). The causal factors are recognized as overlogging, illegal logging, shifting cultivation, and the expansion of agricultural land (FAO 2003). The underlying causes again are poverty and political instability.

Solutions to these problems lie outside the forests, as described by the director general of the FAO in 1999, stressing that forestry problems cannot be solved by the forestry sector alone. The agricultural, socioeconomic, administrative, and political sectors need jointly to address these underlying and primary causes. Even then, deforestation cannot be arrested in one stroke. Strategically planned and coordinated efforts need to be made in an integrated manner to achieve a long-term political settlement, equitable socioeconomic development, and truly sustainable resources management.

More detailed strategies include the decentralization of resources management in appropriate steps and within an appropriate timeframe, meaningful participation by the people, orientation and capacity building of the staff, and research and scientific development in collaboration with international scientific, academic, and interested communities.

The keys to success in sustainable resources management are sustainable political support and regional and global collaboration and cooperation. Action must be taken before it is too late.

(Visiting Research Fellow)

MY SECOND TIME AT CSEAS AND KYOTO

By Poranee Sirichote

This has been my second opportunity to work at CSEAS. It has been 11 years since my first time as a visiting research scholar working in the CSEAS library (September 1993 to February 1994, when Kitano-san was head librarian). At that time the library had started to use the software program FileMaker Pro 2.0 to process a bibliographic database for Thai books. Today, due to the development of applied information technology, the CSEAS library has a database management system for the Thai collection that was introduced in 2001.

During my current stay, I am working on the online cataloging of Thai cremation books in the CSEAS Charas collection (Ch c IV Th collection), as well as cremation books in the general collection (IV Th c collection). This online catalog will be accessible to researchers through the CSEAS Web OPAC-Thai Database. Though I have only 108 days to work in the library, I will try to key in bibliographic data to the Thai database as quickly as possible in order that researchers can fully utilize the Thai collections.

I never thought I would have the chance to work in the CSEAS library again until I met Kitamura-san, who came to visit Khon Kaen University in 2002. In the eleven years that passed since I was last at the CSEAS library, most of the staff has changed, with only one person remaining who I worked with in 1993. Also, there is only one floor for the staff working area instead of two. But though many things have changed, one thing is constant—the friendship among colleagues, who were welcoming to a new member like me. Moreover, Kyoto has not changed much. Even in my first week in Kyoto, I went out to visit some historical places using a Kyoto map and sometimes spoke broken Japanese to ask for directions.

I would like to thank you all—executive committee, administration, and staff—who have given me this opportunity. I am happy to work in the CSEAS library and to stay again in Kyoto.

(Visiting Research Fellow)

海外調査だより
Fieldnotes

アンターレスと昴

五十嵐　忠孝

在来社会において季節の推移を知るもっとも基本的な手がかりは星、中でも昴である。インドネシア各地の在来社会もまたその例にもれず、農耕、漁労の適期を察知する上で昴が主役を演じる。が、そうした中で、その主役が昴ではなくアンターレスである地域があちらこちらに存在するようだ。どうやら東ヌサトゥンガラ州もそのような地域であるらしい。

耕作（とりわけ陸稲植付けの）時期をアンターレスの伏（ぶく）（日没から日出までの間に観察できない状態）の始まる頃とするのは東ヌサトゥンガラ州で広く聞くことができる。フローレス島のリオ人社会では、アンターレスの天頂から西への傾き具合に注視して季節の推移を識別する。日没時に天頂に見える頃が Ka Poo（耕作周期の初頭の儀礼）の時期、天頂から西へ傾く頃が植付け準備、西の水平線に入る（＝伏入り）頃が陸稲の植付け時期、というように。アンターレスに注目して暦月の進行を知るのは同島のラマホロット人社会でも同様であるが、ここではアンターレスと月との会合（接近）が利用される。陸稲の植付け時期はアンターレスと“ついたち月”とが会合する頃というからアンターレスの伏入りの頃に相当する。同様な暦月判定方法はレンバタ島、スンバ島などにも知られる。スンバ島ではアンターレスの伏入りを鳥の巣籠りに譬えて、そのころの暦月を“巣籠り月”と呼ぶ。

では昴は注目されていないのだろうか？東ヌサトゥンガラ州においても昴は決して無視されているわけではない。いうまでもなく、昴とアンターレスは天空のほぼ反対側に位置するから、両者が同一時刻に天空に見えることはありえない。このことが東ヌサトゥンガラ州に広く知られているのは、今日でも様々な風に語られるのを聞くことができる、昴とアンターレスがなぜ天空の反対側にいるようになったのかを説明する近親婚伝説（2つの星は近親婚を恥じて互いに会わない様に天空の反対側に逃げた）をあげるまでもなく、他にも、「（大小2つの）マゼラン雲が互いに近寄らない様に、昴とアンターレスは決して会わない」という意味の言い慣わしがあることや、“昴とアンターレスの様に”といえば「（憎しみから、あるいは恥しさから）互いに顔を合わせない」ことの譬えとして使われる決まり文句であることからも知ることができる。

このように東ヌサトゥンガラ州で昴は決して無視されているわけではない。しかし季節の推移を察知する上での手がかりとして昴が注目された例は、筆者が知り得た限り、Ka Poo の時期決定（夜半に西の地平線低くアンターレスが、東の地平線低く昴が見える時期）ぐらいのものである。多くの社会では昴が耕作の適期予知を行う上で主役である一方で、東ヌサトゥンガラ州では耕作の適期予知となると昴の出番がなくなるのはどうしてだろう。（研究所助教授）

連絡事務所だより

Letters from Liaison Offices

ジャカルタ Jakarta

岡本　正明

私のインドネシア滞在は、バンドン市とマカッサル市で合計すると3年10カ月あまりになる。この間、ジャカルタにはときどき来るだけだったので滞在期間は合計しても1カ月半程度であった。これまでのジャカルタといえばイヤな、妙な思い出しかない。例を挙げよう。①ホテル・インドネシア前のバス停で四人組に襲われた。②チキニ駅横の散髪屋で散髪中、横のオカマ男性が化粧を終えて外見を女に変貌させるや否や、ディスコ用音楽カセットを回して踊り狂い始めたのを見て驚愕した。③チュット・ムティア通りで白昼に中年の売春婦から "Are You for Me?"（貴方は私のものなの？）と妙な誘い言葉をかけられた。④クウィタン通りで向こうからやってきた若い男性から怖い顔で突然、"Cina!"（華人め！）と吠えられた。

さて今回は長期滞在である。従ってジャカルタの別の面もじっくり経験することができると思ってやってきた。特にジャカルタの知識人社会に交われることを期待していた。2月18日に最初のその機会がやってきた。

その日、前大統領アブドゥルラフマン・ワヒッドを担ぐ形で新設された「ワヒド研究所」が主催したセミナー「イスラームと2004年総選挙での民主化への移行」に呼ばれて出席した。開会挨拶をしたワヒド氏はセミナーの中身を知らないのに「このセミナーはとても重要である」と述べただけで帰り、その後は、グレッグ・バートン（オーストラリア）、シャフィー・アンワル（インドネシア、イスラーム雑誌『ウマット』編集長）、ムハマド・ソバリ（インドネシア、文化人）、ロバート・ヘフナー（アメリカ）といったイスラーム研究者が次々と話をした。あまり面白くなかった。セミナーのテーマに沿うなら、各政党のイスラーム対策、イスラーム政党の具体的選挙戦略なども話すべきであった。しかし講演では漠然と、「イスラーム諸政党の得票数は99年総選挙より減る」とか、トルコにおけるイスラーム事情などが話題になるだけであった。話の中身が漠然と宙を舞っていた。私がイスラーム諸政党の具体的票集めの方法などを質問しても誰も答えてくれなかった。

仮にジャカルタで生活しているインドネシアの知識人がこうしたさもアカデミックな議論に満足し、そこに西欧人学者を交えて喜んでいるとしたら、このことの方が私にとって上の四つの経験よりももっとイヤなジャカルタ生活の思い出になってしまう。まさか今のジャカルタでそんな思い出は残らないだろうが。　（研究所助教授）

バンコク Bangkok

Soi Stories

By Patricio N. Abinales

The second half of FY2003 has been busy for the CSEAS Bangkok Liaison Office. On 26–28 November, the office hosted a mission from Kyoto University's Finance Department and the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). Professor Kono Yasuyuki was main host and guide. The visit included a meeting with officers of the National Research Council of Thailand where the parties discussed future cooperation in research and education between Japan and Thailand.

The members of the mission visited the CSEAS Liaison Office, other liaison offices of Kyoto University, and several Thai universities where Kyoto University graduate students and researchers are doing fieldwork.

CSEAS Director Tanaka Koji and chief of administration department Mr. Fukumoto Minoru visited the Liaison Office in February 2004. Another visitor during the month was Professor Akamine Jun of Nagoya City University, who is studying the trade in sea cucumbers in Bangkok and southern Thailand. The Office facilitated his visit to Chinatown in Bangkok, as well as Nakhon Si Thammarat in southern Thailand.

Workshops and Forums

The Bangkok staff participated in the conference "A Plural Peninsula: Historical Interactions among Thai, Malays, Chinese and Others," sponsored by the National University of Singapore's Asian Research Institute, Chulalongkorn University's Institute of Asian Studies, and the Regional Studies Program of the Institute of Liberal Arts at Walailak University. The conference was held at Walailak's campus in Nakhon Si Thammarat on 5–7 February 2004. Dr. Donna Amoroso was invited as *Kyoto Review of Southeast Asia* editor and Patricio Abinales as a representative of CSEAS.

The conference presented papers on linguistic, cultural, economic, and political interactions in the

Kyoto University and Ministry of Education Mission headed by Prof. Kono Yasuyuki, with staff of the Foreign Researchers Division, National Research Council of Thailand

peninsula, with emphasis on the borderland straddling Thailand and Malaysia. Communities living in the borderland and travelers passing through it—for trade, religious, and other activities—have made state attempts to define borders and ethnicities difficult and its cultural life correspondingly rich. Papers from the conference can be found in the Liaison Office's newly reorganized reading room.

An equally important outcome of the conference is the collaboration between Walailak University's Regional Studies Program and the *Kyoto Review* to jointly prepare selections of *Kyoto Review*'s first four issues for publication. This collaboration is an important expansion of the Center's network of institutional contacts into southern Thailand.

Finally, on April 2, the Liaison Office co-sponsored, with the Department of Political Science of Chulalongkorn University, a public forum on political leadership in Southeast Asia titled "Managers or Statesmen? Image and Reality in Southeast Asian Political Leadership." The invited panelists included Vedi Hadez of the National University of Singapore, Francis Loh Kok Wah of University Sains Malaysia, Paul Hutchcroft of the University of Wisconsin-Madison, and Pasuk Pongphaichat of Chulalongkorn University. Professor Benedict Anderson of Cornell University was discussant and Jiles Ungkhakorn of Chulalongkorn University moderated. The forum drew a large and diverse audience from the academe, media, embassies, and non-government organizations in and around Bangkok, with over 200 people attending.

Student Kenkyukai

The Bangkok Office continues to host the *Thai Kenkyukai* where students and researchers can discuss field notes, written reports, or chapters of theses and dissertations in progress. The *kenkyukai* is now a regular Liaison Office activity that was begun by Dr. Yanagisawa Masayuki and sustained by Kyoto University graduate students Ms. Endo Tamaki and Mr. Mizutani Yasuhiro.

Two *kenkyukai* have been held recently. On 20 December 2003, Dr. Shigetomi Shinichi of the Institute of Developing Economies in Tokyo, now visiting scholar at the Faculty of Political Science at Thammasat University, shared his research findings on rural NGOs in Thailand. On 1 February 2004, Mr. Morita Atsuro (Ph.D. candidate, The University of Tokyo) presented "The World of Chaang: The Labor Market of *Shokugyo Shudan* in Industrial Thailand" and Mr. Ichinosawa Jumpei (Ph.D. candidate, The University of Tokyo) discussed his research findings on "Motivations behind the Purchase of Personal Computers among Thai Students."

Dr. Shigetomi Shinichi of Institute of Developing Economies at the 20 December 2003 *Thai Kenkyukai*

Office 2 as temporary headquarters of *Kyoto Review of Southeast Asia*

More discussions are planned for the future, including invitations to Thai scholars to share their research and academic interests with the *Thai Kenkyukai*.

Office Changes

Office 2, where the English desktop computer, copier, and fax machine are located, has been converted into a functioning office/reading room for students, researchers, and visitors. One unexpected benefit of the reorganization was the re-discovery of some important resource materials, such as Thailand's 1960 and 1970 population census data, which will be added to the CSEAS Library collection.

(Associate Professor of CSEAS)

＜来　訪　者＞

2003年11月13日Wil de Jong（国際林業研究センター主任研究員）、Carol J. Pierce Colfer（同）▼11月15日Lewis Lancaster（カリフォルニア大学ECAI所長）、Peter Xinping Zhou（同東アジア図書館長）▼11月28日Achoki Robin Manono（JICAアフリカ人造り拠点事業研修員）、Christophe Le Page（国際農林水産業研究センター外国招聘共同研究員）▼2004年2月5日Cheng-Jen Shih（台湾大学教育センター教授）、B. J. Fwu（同助教授）、Flora F. Tien（同助手）▼2月17日Ahmad A. Mattjik（ボゴール農科大学学長）、Hadi Susilo Arifin（同農学部農学科造園学研究所長）他1名▼3月9日Azyumardi Azra（インドネシア国立イスラム大学学長）▼3月17日Naris Chaiyasoot（タマサート大学学長）、Chirapan Boonyakiat（タマサート大学国際交流担当副学長）

Kyoto Review of Southeast Asia: Issues 4 and 5

As Southeast Asia adjusts to China's emergence as a major market economy, regional economic integration is proceeding quickly via bilateral and multilateral free trade agreements. We believe it is crucial that a socially informed regional dialogue about economic governance develop in step with the quickening flow of capital, goods, and labor. There is also a tremendous gap between the work of professional economists and the NGOs that deal with the human costs of economic change. Bridging this gap would go far toward developing such a dialogue.

In Issue 4, we emphasize two overlapping aspects of economic integration: the migration of labor within the region and Japan's economic ties with Southeast Asia. Other highlights include a major assessment of the postwar Philippine economy, a critique of Mahathir Mohamad's economic legacy, and two visions of Thailand's economic future. In this issue we also introduce Renditions—translations of longer or less accessible writing from the region.

Issue 5 presents a diverse look at Islam in Southeast Asia. Our review essays discuss the Islamization of knowledge among Malaysian intellectuals and the intersection of Islamic law and gender issues in Malaysia, Indonesia, Singapore, and the Philippines. Reprints include the fruits of our collaboration with the Philippines' *Newsbreak* magazine (on art, women, youth, and Aceh) and the US academic journal *Positions* (on Indonesian reactions to the US invasion of Iraq).

A number of Features highlight Muslim minorities—in northern and southern Thailand, Vietnam, and the southern Philippines—in history, culture, economic development, and educational policy. In Renditions, we are proud to present an out-of-print short story by the Muslim Filipino writier Ibrahim A. Jubaira in its original English, as well as in Filipino, Bahasa Indonesia, Thai, and Japanese.

(Reported by Donna J. Amoroso)

人　の　動　き

濱下武志（2003年10月24～26日）韓国「日韓歴史家会議参加」▽P. Abinales（11月5～30日）タイ「タイ国が保有するウォーラシア地域に関する資料の調査」▽石川登（11月6～18日）アメリカ合衆国「労働移動に関する資料収集」▽白石隆（11月14～24日）シンガポール他「シンガポール・マレーシアにおける中産階級関連のデータ収集」▽河野泰之（11月23～27日）タイ「バンコク連絡事務所の将来構想検討のため」▽岡本正明（11月24日～12月30日）インドネシア「東南アジア低湿地における温暖化抑制のための土地資源管理等に関する研究」▽阿部茂行（11月26日～12月19日）タイ他「『国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済』に関する調査研究」▽安藤和雄（11月27日～12月24日）バングラデシュ「21COEのフィールドステーションに関する研究」▽山田勇（11月29日～12月7日）インドネシア「東南アジアの泥炭湿地管理のためのワークショップ出席」▽P. Abinales（12月3日～2004年5月15日）タイ他「バンコク連絡事務所管理運営等」▽西渕光昭（12月6～14日）バングラデシュ「第10回アジア下痢症・栄養会議及び第8回汎太平洋新感染症国際会議出席」▽白石隆（12月6～16日）インドネシア他「フィリピン・インドネシア国境警備についての資料収集」▽藤田幸一（12月8～23日）インド「シッキム州農村の農業生態と社会経済に関する臨地研究」▽濱下武志（12月11～15日）中国「北京大学『中国と世界』会議参加」▽同（12月19～23日）香港「香港大学アジア研究センターにおける香港経済に関する資料調査」▽田中耕司（12月20日～2004年1月6日）ミャンマー「中国国境地域の稲作技術移転と農業技術の変容に関する調査」▽水野広祐（12月20日～2004年1月8日）インドネシア「インドネシアの地方政治と経済に関する研究」▽西渕光昭（12月22～24日）中国「食品の病原微生物に関する共同研究打合せ」▽木谷公哉（12月22～29日）タイ他「タイ及びマレーシアの通信環境調査」▽白石隆（2004年1月7～11日）アメリカ合衆国「ワークショップ "Japan and Asia" 出席」▽阿部茂行（1月7～20日）同「『アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究』に関する研究成果取りまとめ」▽石川登（1月13日～2月5日）インドネシア「インドネシア西カリマンタン州における労働移動に関する臨地調査」▽白石隆（1月14～21日）インドネシア「インドネシア世論調査ワークショップ出席」▽河野泰之（1月20～28日）タイ「生態資源利用に関する資料収集」▽柴山守（1月21日～2月1日）タイ・ベトナム「古文書文字認識システムに関する研究打合せ」▽阿部茂行（1月29日～2月2日）タイ「『東アジアにおける代替的移行経済開発パラダイムにむけて』に関する会議参加」▽田中耕司（2月5～10日）インドネシア「温暖化抑制のための地域社会のエンパワーメントに関する研究打合せ等」▽阿部茂行（2月5～22日）タイ・フィリピン「タイとベトナムにおけるセーフティネットに関する資料収集」▽山田勇（2月6日～3月5日）インドネシア「バリ・マングローブプロジェクト短期専門家会議」▽五十嵐忠孝（2月7～22日）インドネシア「在来暦法調査」▽安藤和雄（2月10～26日）バングラデシュ他「バングラデシュとミャンマーの少数民族における持続的農業と農村開発」▽松林公蔵（2月13～28日）ラオス「ラオス高齢者医学調査」▽河野泰之（2月13～21日）ミャンマー「ミャンマーにおける小規模灌漑農業の実態調査」▽濱下武志（2月15～25日）中国・香港「上海・廈門・香港における華僑資料調査」▽藤田幸一（2月15日～3月2日）ラオス「北部ラオス農村における金融実態調査」▽田中耕司（2月18～22日）タイ「農林水産学研究の国際連携と東南アジア大陸部フィールドステーションの連携強化のため」▽速水洋子（2月18日～3月7日）ミャンマー・タイ「東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容に関する調査」▽石川登（2月21日～3月8日）マレーシア「東マレーシアにおける自然環境認識の比較研究」▽林行夫（2月25日～3月5日）中国「『宗教政策をめぐる中国（西双版納）＝タイ関係』に関する調査等」▽阿部茂行（2月26日～3月11日）イタリア他「『アジアと日米欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究』に関する研究成果取りまとめのため」▽水野廣祐（2月28日～3月24日）インドネシア「インドネシアの地方政治と経済に関する研究」▽西渕光昭（2月29日～3月5日）インドネシア「第4回アジア食品栄養安全会議出席」▽白石隆（3月3～7日）インドネシア「白人政策対話」▽柴山守（3月8～13日）ベトナム「日本ベトナム地理情報学コンソーシアムに関する打合せ」▽林行夫（3月12～27日）タイ「『開発僧と地域関係』に関する調査」▽濱下武志（3月13～24日）シンガポール・香港他「東南アジア新中間層と華僑・華人の関係に関する調査等」▽松林公蔵（3月14～18日）ミャンマー「熱帯医学ワークショップ参加」▽C. Hau（3月14～24日）タイ・フィリピン「フィリピン大学、アテネオ・デ・マニラ大学、タマサート大学、チュラロンコン大学—『流れ』についてのデータ収集」▽北村由美（3月14～24日）インドネシア他「JSPS共同研究『中産階級の研究』に関する資料収集」▽白石隆（3月16～21日）タイ他「日タイ拠点共同研究打合せ」▽阿部茂行（3月18～21日）大韓民国「"Rising China ↗

研究会報告
Report of Seminars

◆Seminar on "Islam and Democracy in Indonesia and the Muslim World"
11月23日 Riza Sihbudi (LIPI) "Islam and Democracy: The Debate and Its Implications to the Muslim World and Indonesia"

◆Special Seminar
11月21日 Srawooth Paitoonpong（センター外国人研究員）"Women in the Labor Market: The Case of Japan and Thailand" ▽11月28日 Chiristophe Le Page (CIRAD) "Multi-agent System and Role Games: Collective Learning Processes for Ecosystem Management"▽12月4日 Cho Cho San（同）"*Taungya* Cultivation (Shifting Cultivation) and Landless Household in Rural Myanmar: The Case of a Village in Yezin, Central Myanmar" ▽1月27日 Salvacion Manuel-Arlante（同）"Organization of the CSEAS Special Collections"▽3月3日 Christopher A. Gregory (ASAFAS 外国人研究員) "Towards a Political Theology of Rice"

◆JSPS Special Seminar
2月6日 Chua Beng Huat (National University of Singapore) "Community and Culture: The Cost of Ascribed Membership"

◆「東南アジアの自然と農業」研究会
第113回例会：12月12日 松田正彦（センター）「ミャンマー農業の多様と現在」
第114回例会：2月20日 佐々木綾子（京都大学）「タイ北部におけるミアン（噛み茶）林管理とその変容――チェンマイ県パンマオー村の事例」

◆「東南アジア大陸山地部」研究会
第11回 12月19日 和田由美子（東京大学）「ラオス・ルアンプラバン県の焼畑農業を中心とした土地利用変化モデルに関する研究」
第12回 3月5日 葉　勝億（京都大学）「中国福建省の山地農村における生業の変遷」

◆Special Seminar of "State, Market and Community Study Group"
1月13日 Augustina Situmorang (Research Center for Population Indonesian Institute of Science) "'Living apart together': Changing Attitude toward Marriage among Women in Japan"
2月16日 Urano Mariko (Hokusei Gakuen University) "Appropriation of Cultural Symbols and Peasant Resistance: A Case Study from East Kalimantan, Indonesia"
2月20日 Yasuba Yasukichi (Osaka Gakuin University) "Alternative Theories of Southeast Asian Development"
3月26日 Zamroni Salim (Research Centre for Economics, LIPI) "The Analysis of Intra-Industry Trade between Indonesia and Japan: A Case Study in Manufactured and Agricultural Products"

◆「民族間関係・移動・文化再編」研究会
第16回 1月26日 黒木雅子（京都学園大学）「日系アメリカ人キリスト教女性のアイデンティティ交渉――『主人の道具』を流用していかに自らの家を再建できるか？」
第17回特別研究会：ミャンマーにおける宗教と社会
2月6日 奥平龍二（元東京外国語大学）「ミャンマーの『国造り』と仏教――上座仏教『全宗派合同会議』のゆくえ」▽飯國有佳子（総合研究大学院大学）「上ビルマ――村落における女性の出家行為の意味とその変化」▽伊野憲治（北九州市立大学）「慈悲の政治――アウンサウンスーチーの思想と行動」▽吉松久美子（元大東文化大学）「ミャンマーにおける回族（パンデー）の交易路と移住」

◆「東南アジア社会と文化」研究会
第15回例会：11月21日 山口裕子（一橋大学）「現代インドネシアにおける＜歴史の創造＞をめぐって――ブトンの過去の語り方」
第16回例会：1月16日 平松秀樹（大阪大学）「タイ現代文学にみる＜女性の解放＞及び＜業からの開放＞――セーニー・サオワポンの作品から」
第17回例会：3月18日 村上忠良（宮崎公立大学）「シャン仏教チョーティ派の歴史と現状――シャン州における仏教実践についての事例研究」

◆「農村開発における地域性」共同研究会
第11回：生活文化・暮らしの基層
3月22日 榊　和良（北海道武蔵女子短期大学）「中世ベンガル・フォークロアの宗教性――比較宗教学的考察」

↘ and the East Asian Economy" に関する会議出席」▽柳澤雅之（3月18～21日）タイ「コンケン大学と学術協定に関する意見交換等」▽石川登（3月19～30日）インドネシア他「JSPS『社会フロー』プロジェクトに関する打合せ」▽田中耕司（3月20～24日）インドネシア「『ウォーラセア海域における生活世界と協会管理の動態的研究』に関する研究打合せ等」▽藤田幸一（3月21日～4月6日）ラオス「ラオス経済政策支援に関わる会議出席等」▽田中耕司（3月27～31日）ラオス「ラオスにおける農業農村開発の研究」

2004年4月5日発行
発　行　〒606－8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア研究所
Tel　(075) 753－7344
Fax　(075) 753－7356
e-mail: editorial@cseas.kyoto-u.ac.jp
編　集　石川　登・米沢真理子